

「にげる」「のがれる」「まぬがれる」の意味

名嘉真 三 成

1. はじめに

上の三語は、いずれもくある主体が何か対象を嫌って、遠ざかる（会わないですむ）>という共通する意義特徴を持つ（注1）。例えば、これらの語は

（１） オートバイを一台、用意してくれ。ガソリンを一杯にしたやつだ。

それに乗って逃げる。（『エヌ氏の遊園地』 星 新一）

（２） 危うく災いをのがれる。（『新明解国語辞典』 以下『新明解』と略）

（３） 責めを、まぬがれる。（『新明解』）

のように用いられ、（１）は犯人が追っ手から、（２）はある人が災いから、そして（３）はある人が責めから、それぞれ遠ざかる（会わないですむ）ことを意味している。しかし、これら三語は意味が微妙に異なるものと考えられ、例えば次の

（４） 鬼ごっこで、鬼に掴まらないように逃げる。

の文では、「逃げる」の代わりに「のがれる」や「まぬがれる」を代入することはできない。また、

（５） 津波からのがれる。（『類語例解辞典』 以下『類語例』と略）

という文の「のがれる」の位置に「まぬがれる」を挿入することはできないので、結局これらの語は意義素を異にするとと言える。従って、これら三語の意味がどのように異なるのか、具体的に明らかにすることが望まれる。

以上の観点から、ここでは「にげる」「のがれる」「まぬがれる」の三語について、意味分析を行うことにする。

2. 辞書の記述

まず、意味分析をスムーズに行うため、これら三語の意味が辞書でどのように記述されているか、見ることにしよう。その際、便宜上次の五つの辞書を参考にする。

【A】 『新明解』（三省堂 1972）

【B】 『新選国語辞典』（小学館 1959 以下『新選国』と略）

【C】 『日本語大辞典』（講談社 1989 以下『日本語』と略）

【D】 『広辞苑』（岩波書店 1955）

【E】 『日本国語大辞典』（小学館 1972 以下『日本国』と略）

はじめに、「にげる」についての辞書の記述を示す。

*「にげる」

〔A〕『新明解』

- 1, 追われてつかまらないように、遠くへ去る。のがれる。
- 2, 危険な・（自由を縛る）ものからはなれる。
- 3, めんどうなものに近づかないようにする。
- 4, 〔競馬・競技で〕追いつかれないうちに勝つ。

〔B〕『新選国』

- 1, つかまらないように去る。逃亡する。
- 2, さける。責任やめんどうなことをさけてのがれる。

〔C〕『日本語』

- 1, のがれ去る。
- 2, 責任を避ける。
- 3, 正しい位置からそれる。
- 4, 競技で追いつかれないで勝つ。

〔D〕『広辞苑』

- 1, とらえられないように避けて走り去る。
- 2, 避ける。責任を回避する。
- 3, 敗北する。後退する。

〔E〕『日本国』

- 1, つかまらないように走って去る。危険を避けてのがれる。また、自分にとって具合の悪い場所から抜け出て遠くに去る。
 - 2, 面倒なことに近づかないようにする。関係することから身をかわす。避ける。
- 次に、「のがれる」について示す。

*「のがれる」

〔A〕『新明解』

- 1, あぶない・（不快な）状態から遠ざかる。
- 2, めんどうな・（煩わしい・負担になる）事をしないでいいような状態になる。

〔B〕『新選国』

- 1, にげはしる。にげる。
- 2, はなれ、とおざかる
- 3, まぬかれる。

〔C〕『日本語』

- 1, にげる。
- 2, 免れる。助かる。

〔D〕『広辞苑』

1. (相手の勢力の及ばないところまで) にげ去る。離れとおざかる。まぬがれる。
2. 相手の意思表示に従わない。

〔E〕『日本国』

1. つかまらないように逃げる
2. 離れ遠ざかる。触れないように離れた位置に身を置く。しなくてすむようにする。
3. ある状態にならなくてすむ。まぬがれる。
4. 言いのがれる。辞退する。

最後に、「まぬがれる」については次のように記述されている。

*「まぬがれる」

〔A〕『新明解』

好ましくない物事に会わないですむ(ようにする)。

〔B〕『新選国』

のがれる。ぐあいよくさける。

〔C〕『日本語』

1. そのことをしなくても済む。
2. 嫌なめにあわないですむ。

〔D〕『広辞苑』

避けてその事にあずからない。その場をはずす。のがれる。

〔E〕『日本国』

危険なことや不利なことなどから、都合よくのがれられて、そのことに関わらないですむ。具合よく、好ましくない物事に会わないですむ。のがれる。まのがる。

上の記述を概観すると、三語のうち「まぬがれる」のみは意味記述が少なく、意味範囲の狭いことを示唆する。これに対し、「にげる」と「のがれる」は辞書によって記述のばらつきが見えるものの、派生的意味を有し意味範囲が多少広がっている。

意味を定義する言葉に注目すると、

「にげる」の項——のがれる。

「のがれる」の項——にげる。まぬがれる。

「まぬがれる」の項——のがれる。

のように問題の三語で説明され、「のがれる」が意味定義の言葉としてよく用いられている。恐らく、「のがれる」の方が意味的に「にげる」と「まぬがれる」の意味分野をカバーする特色を有するからと思われる。ちなみに「のがれる」の項の意味定義に、「にげる」と「まぬがれる」の両語を用いて説明するのは、このことを意味するであろう。

ともあれ、辞書の記述に具体的主体は示されていないが、辞書の記述を検討しても、三語が前掲のくある主体が何か対象を嫌って、遠ざかる(会わないですむ)>という共通の意義特徴を持つことにはかわりはない。

3. 意味分析

さて、三語の意味分析を行う段取りになったが、前掲の共通の意義特徴にちなんで、まず主体に関することから始めよう。

3・1. 主体

動詞の中には、「育つ」や「生える」などのように生物全般に使用されるものもあるが、これら三語は<遠ざかる（会わないですむ）>という移動的意義特徴を持ち、一般に<動物>を主体にとる。このうち、「にげる」は動く<動物>全般に用いられる。目に見える動物を分類すると、概して

哺乳類	ヒト
	サル
	イヌ
鳥 類	ハト
爬虫類	ヘビ
	カメ
魚 類	タイ
昆虫類	ハチ
甲殻類	エビ
貧毛類	ミミズ

となる。これらの動物を主体に例文をつくると、例えば

- (6) (人、猿、犬、鳩、蛇、亀、鯛、蜂、蝦、ミミズ) が、掴まらないように逃げる。

のような文ができ、いずれの動物でも、文はグラマティカルである。これに対して、「のがれる」と「まぬがれる」は原則として同じ動物でも<人>を主体にする。例えば、

- (7) オセッチャンは健全な町民として野放しになったままの殺人者を恐怖して神戸に逃れた。(『揺れ動く』第二部 大江健三郎)

- (8) 自分の内部における逡巡、沖縄からの拒絶を、はっきりと意識することをまぬがれていた。(『沖縄ノート』 大江健三郎)

などは、普通の文である。しかし、これに関連して次の

- (9) ×(猿、犬、鳩、蛇、亀、鯛、蜂、蝦、ミミズ) は、恐怖して神戸に逃れた。

- (10) ×(猿、犬、鳩、蛇、亀、鯛、蜂、蝦、ミミズ) は、沖縄からの拒絶をはっきりと意識することをまぬがれた。

などの文は擬人法ならいざ知らず、多少おおげさな表現であり、普通の文とは言い難い。このことは、「のがれる」と「まぬがれる」が(7)(8)のように文章語的であり、後

述のとおり、これらの語が＜抽象的＞対象語を必要とすることと無関係ではないであろう（注2）。すなわち、取り繕った時として美的な文章語や（8）のように「意識する」との対象語は、感性を持つ＜人＞の動作にふさわしい性格の表現であるから、＜人＞以外の動物には用いにくいと考えられる。

3・2. 対象

次に、上の主体がどのような対象をとるのか、考察しよう。

動詞はそれに内在する意味に応じて、いくつかの格体制をとる。「にげる」という動詞の場合、構文論上五つの格の共演成分を持つ。

- (11) 犯人が車で現場から東名高速道路を東京に逃げた。（『講座日本語と日本語教育』第4巻 宮地裕他編）

のように。この文は「のがれる」を代入しても、文章語的で改まった表現になるとはいえ、不自然にはならない。

- (11)′ 犯人が車で現場から東名高速道路を東京に逃れた。

文(11)・(11)′の五つの格は、対象を示す「現場」も含めて＜具体的＞なものである。いわば、対象が＜具体的＞な性格を有する時、「にげる」と「のがれる」はほぼ同じ意味で使用可能となる。前掲の辞書の記述で、「にげる」の項に「のがれる」とことと説明があったのは、この部分の意義特徴に注目した結果である。さらに例を示そう。

- (12) 刑務所から逃げる。（『新明解』）

- (12)′ 刑務所から逃れる。

- (13) 逃げだしてゆく自分の背を、自分の眼で眺めているように。（『沖縄ノート』 大江健三郎）

- (13)′ 逃れてゆく自分の背を、自分の眼で眺めているように。

- (14) 嫌な仕事から逃げる。（『日本語』）

- (14)′ 嫌な仕事から逃れる。

- (15) 職務から逃げる。（『類語例』）

- (15)′ 職務から逃れる。

やはり二語はパラレルに使用される。(13)～(15)′の文は格関係が(11)や(11)′と異なるが、対象が＜具体的＞であることに違いはない（注3）。

一方、「まぬがれる」は二語と違って(11)の文の中に挿入できない。

- (16) ×犯人が車で現場から東名高速道路を東京に免れた。

それはこの語が、

- (17) すんでのところ、死を免れた。（『類語例』）

のように＜抽象的＞対象語をとり、表現上＜具体的＞な要素としての格関係が二語に比べて現れにくいからであろう。辞書の記述のとおり、「まぬがれる」の意味範囲は狭いと考えられる。さらに例を示せば、

- (18) 難をまぬがれる。(『新選国』)
 (19) 責任をまぬがれる。(『日本語』)
 (20) 10連敗をまぬがれる。(『日本語』)

のとおりである。

ところで、(17)～(20)の文は「のがれる」を挿入できる。

- (17) すんでのところで、死を逃れた。
 (18) 難を逃れる。
 (19) 責任を逃れる。
 (20) 10連敗を逃れる。

これにより、「のがれる」はく抽象的>対象語にも使用できることになる。辞書の「まぬがれる」項に「のがれる」こととの記述があったのは、この意義特徴に注目したからである。

3・3. 動作

続いて、動作を表すく遠ざかる(会わないですむ)>の仕方について述べる。

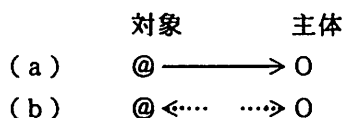
具体的かつ抽象的対象語をとる「のがれる」には、二つの動作の仕方がある。(a)対象の下からく遠ざかる>こと、(b)対象にく会わないですむ>ことの二つである。

- (21) 重囲を逃れる。(『新明解』)
 (22) 都会の騒音を逃れる。(『新明解』)
 (23) 僕は自分のこの錯覚から、無傷で逃れることはできなかった。(『沖縄ノート 大江健三郎』)

など具体的対象をとる文は(a)の用法であり(注4)、(17)～(20)の文や

- (24) 罪を逃れる。(『日本語』)
 (25) 災難を逃れる。

などのように、抽象的対象をとる文は(b)の用法となる。それを図示すると、概略



となる。

他方「にげる」と「まぬがれる」は、前者が具体的対象語、後者が抽象的対象語しかとらないので、「にげる」は(a)の用法に、そして「まぬがれる」は(b)の用法に使用されることになる。

- (26) 小鳥がかごから逃げる。(『類語例』)
 (27) (母国から)外国に逃げる。(『新選国』)
 (28) (ボールから)腰が逃げる。(『日本語』)
 (29) 国会は与野党の対話により、解散を免れた。

(30) (学長は、学生自治会の) 追及を免れる。(『言泉』)

(31) 焼失を免れた(文書)。(『言泉』)

以上の意味分析から、これら三語の意義素をまとめて示すと、次のようになる。

- 1) 「にげる」：<人を含めた動物が、具体的な対象を嫌って、遠ざかる。>
- 2) 「のがれる」：<人が、具体的かつ抽象的な対象を嫌って、遠ざかるか会わないですむ。>
- 3) 「まぬがれる」：<人が、抽象的な対象を嫌って、会わないですむ。>

4. おわりに

1976年4月、大学院に入学すると中本正智先生のご講義も拝聴するようになった。先生のご講義はいずれも緻密かつ実証的で高度な内容を常としていたので、毎回拝聴するのが楽しみであった。あまりにも有意義であったので、しまいには大学のみならず、「東京言語研究所」での理論講座の授業にも出させていただいた。先生は毎回、分厚いガリ刷りの生の資料に基づいて講義され、内容もさることながら言語研究の方法や論文執筆の方法なども理解でき、大変勉強になった。「論文の結論は多言を要しない。それは綿密な資料に語らしめよ。」が口癖であった。曲がりなりにも私が言語研究を行えるようになったのは、先生の優れた内容のご講義と真摯で緻密な学問的態度に接し、感動を覚えたことによる。その意味で、先生は感謝すべき真の恩師である。

本稿で扱った意味分析に関する「意味論」のご講義は、4年間受講した。先生は意味研究が遅々として進まぬ中、言語の内容面と形式面を共にバランスよく研究することを、提唱しておられた。「語彙論」「文法論」「音韻論」の全ての面で偉大な業績を上げられたのは、このことを物語っている。「意味論」でのご指導は、今では辞書の意味記述の方法などに生きて働き、言語研究の妙味を豊にしてくれる。

先生の恩恵に深く感謝し、心からご冥福を申し上げる。

注

- (1) 『類語例解辞典』(小学館)108 ページには、これら三語に共通する意味として、「何かを嫌って遠ざかる」のように記述されている。
- (2) 同著の同ページに、「逃げるは具体的にそこから離れる意であるのに対して、逃れる・免れるは、抽象的で、そのことにかかわりを持たない状態になる意。」とある。
- (3) 例えば、(15)の文であれば「職員が多忙で今日から来週まで

職務を逃げる」のように言えるが、この表現は普通(11)の文より、格の共演成分が少なくなることが考えられる。なお、＜抽象的＞対象語の場合、例えば、「すんでのところで、死を逃れる」の文などは、さらに共演成分が現れにくくなる。

- (4) (23)文は対象が抽象的と言えなくはないが、それを文学的表現で意味上＜具体的＞に転換してとらえたと考えられる。

主要参考文献

- 国立国語研究所 『動詞の意味・用法の記述的研究』(秀英出版 1972)
- 国広哲弥 『意味論の方法』(大修館書店 1982)
- 服部四郎 『言語学の方法』(岩波書店 1960)
- 池上嘉彦 『意味論』(大修館書店 1975)
- 中本正智 『日本語の原景』(力富書房 1981)
- 柴田武編 『ことばの意味』1(平凡社 1976)
- 東京都立大学国語学研究室 『日本語研究』1(外為印刷所 1978)
- 徳川宗賢・宮島達夫編 『類義語辞典』(東京堂出版 1972)
- 遠藤織枝他編 『類語例解辞典』(小学館 1994)
- 金田一京助他編 『新明解国語辞典』(三省堂 1972)
- 日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』(小学館 1972)
- 新村出編 『広辞苑』(岩波書店 1955)
- 金田一京助他編 『新選国語辞典』(小学館 1959)
- 梅棹忠夫他編 『日本語大辞典』(講談社 1989)
- 大江健三郎 『沖繩ノート』(岩波新書 1970)
- (なかま みつなり 琉球大学教授)